

て扱っており、この部分が以後発刊された裁本の基礎となったとみられ、裁本における先駆的役割を位置づけるものといえよう。

## C-19 「裁物秘伝抄」の裁本における先駆的位置づけについて

東京家政学院短大 岡野 和子

1. 江戸時代の服装形態および裁縫技術の変遷を觀察するに当って、当時刊行された江戸小袖裁本を検討するのは、その一方法と考えられる。従来元禄8年刊の「当流絹布裁様」が現存する裁本の最古のものと考えられていたが、越村芳野氏蔵書、元禄3年(1690)刊「裁物秘伝抄」が飯島偉孝氏により発見され、氏のご好意で拜見する機会を得た。宝永7年(1710)刊、「絹布裁本」の序文に、「先に裁物秘伝書有て世に行る、誠に此道の至要にして世人の重もき宝なり、……」とあることから、この「裁物秘伝抄」が裁本の先駆と推察され、注目すべき貴重な文献といえる。

この裁本の特色、内容などについて、後世のものと対比しながら、調査、考察をおこなったものである。

2. 資料として用いたものは元禄3年刊、「裁物秘伝抄」、氏孝著、京都、大船屋長兵衛校のほか、「当流絹布裁様」、「絹布裁本」、「万金産系袋」、「絹布裁要」、「裁縫早手引」、「当世裁縫独稽古」、「裁物早指南」、「裁物早学問」などである。

3. 後世のものにみられない本書の特色の一つは、「相応裁之算法」が採用されている点であり、裁縫書出版の初期において、数術の導入による合理的裁断法が案出されたということは驚異に値する。後編ともいふべき「裁物問答」は当時おこなわれた裁断技術を問答風にし